

森の幼稚園カリキュラム作成にむけた ビデオ・カンファレンスの試行

岡花祈一郎 杉村伸一郎 林 よし恵 松本 信吾
久原 有貴 日切 慶子 落合さゆり 山元 隆春

1. はじめに

1) 問題背景と研究の目的

広島大学附属幼稚園は、平成18年度から「森の幼稚園構想」を掲げ、裏山にある森での保育活動を増やす試みを行ってきた。その過程で大きな課題として挙げたのが、カリキュラム立案であった。

就学前教育におけるカリキュラムは、就学後のカリキュラムと比較した場合、教科や教育内容が明確とはいいがたく独自の困難性を抱えている。保育では、保育内容（5領域）が存在しているが、ひとつの保育活動は、実際には複数の領域がまたがる複層的なものであることが多い。また、加藤（1997）は、保育カリキュラムは「計画性」というよりも、「即応性、一回性、偶発性」を原則として創出されると指摘している。子どもたちの興味・関心やその状況に応じて臨機応変に保育を展開しようとする保育原理からすると、計画的な幼児期のカリキュラム作成は難しいのである。

このような幼児期のカリキュラムに対して、上野（2007）は、実践記録からカリキュラムを立案することの重要性を指摘している。すなわち、子どもたちの実態や経験の有り様をどのように把握しカリキュラムへ活かしていくかが、保育カリキュラム立案においては重要なポイントであるというのである。実践記録のみならず、日々子どもたちの経験を整理することは、カリキュラム立案に重要な意味があると考えられる。そこで本研究では、附属幼稚園における森の幼稚園カリキュラムを作成するうえで、子どもたちが森での経験を把握する方策としてビデオ・カンファレンスを試行することとした。

保育カンファレンスにおけるビデオ映像を用いる有効性については大豆生田（1996）が指摘している。また、上村（2010）は、保育者養成において実習前に模擬保育ビデオを活用したカンファレンスを実施して、その効果を検証している。しかし、どのような点でビ

デオ映像がカンファレンスに有効なのかというところまで踏み込んで議論されているわけではない。また、いずれの研究もカンファレンスの省察という側面に焦点が当てられており、本研究のようなカリキュラム立案にむけたビデオ・カンファレンスの効果や特質に関して検討されている研究はない。

以上を踏まえ、本研究では、森の幼稚園カリキュラムを作成にむけてビデオ・カンファレンスを試行し、その過程を振り返ることでカリキュラム作成のためのビデオ・カンファレンスの特質と課題を明らかにすることを目的とする。また、そこから得られた知見によりカリキュラム作成にむけて、園内でどのような取り組みが必要かという点についても考察を行いたい。

2) 附属幼稚園における森と「森の日」の概要

広島大学附属幼稚園は敷地内に豊かな里山（森）をもつ附属学校である。このような自然環境を活かした取り組みとして、これまで「森の幼稚園」構想を立ち上げ研究と実践を行ってきた。そのことで保育者も、保育室で行う保育とは異なる、森ならではの保育の手応えや楽しさを感じていた。しかし同時に、保育者の限られた知識や技能だけで森の保育を行なっていく限界も感じられるようになった。そこで、さらに森を活用し、森での遊びの可能性を広げたり、森の恵みを享受するために、自然についての専門知識をもっている「森の達人」を招くこととした。

なお、平成22年度から附属幼稚園では、一日中森で過ごす「森の日」を、年長児は月6回程度、年中児は月2回程度の割合で実施した。その日は森の達人がインタープリター（自然と人との「仲介」となって自然解説を行なう人）として、保育者と一緒に保育を行った。内容としては、ネイチャーゲームを通して五感を通して森に触れたり、身近な自然物を使って飾りや遊ぶものを作ったり、身近にある植物の中で食べられる

物を探して食べてみたり、季節ごとになる森の恵みをいただいたりなどの活動を行ってきた¹⁾。本研究では、この「森の日」の活動を、森の幼稚園カリキュラムの特色ある活動と考えビデオで撮影した。

2. 研究の手続き

- 1) 年長クラス、年中クラスの「森の日」の実践を第一筆者がビデオにて撮影した。週1回程度の観察を行った。1回の観察時間は約90分であった。
- 2) 撮影したVTRのなかからエピソードとして2・3分に編集して、ビデオ・カンファレンスにて参加者一同で視聴して議論を行った。その際、エピソードのトピックや編集の目的や議論したい項目をレジюмеとして参加者に配布した。ビデオ・カンファレンスは計7回実施した。なお、第一筆者が不在の場合や諸事情により、すべてのカンファレンスにおいてビデオを用いてはいない。
- 3) カンファレンスのなかででてきた議論をもとに、「森の日」の子どもたちの体験、保育者や「森の達人」の役割などを整理した。
- 4) その議論をもとに、森の幼稚園カリキュラムを立案した²⁾。

3. ビデオ・カンファレンスの理論的枠組み—本研究におけるビデオ映像の役割—

これまでの授業研究や保育研究において、ビデオ(VTR記録)はデータ収集のひとつの手段として利用されてきた。ビデオは、保育者の働きかけ、子どもの表情、行為、発話など詳細な情報を収集することができる。手書きのメモやICレコーダーなどの音声記録といった記録媒体と比較して、より「豊かな情報」を実践者・研究者にもたらず、目に見える状況だけではなく、ある程度の雰囲気などもリアリティをもって見る者に伝えることができる。従来の研究では、これらのビデオ映像からプロトコルを起したり、事例記録を起すなど、「ビデオの中」から正確なデータを読み取ることを重視してきた。そのためか、近年では、保育研究においても補助的な記録媒体、記憶手段として「録画させてもらえるのであればビデオ撮っておこう」と安易にビデオ記録が用いられる傾向があることは否めないだろう³⁾。

しかしながら、本研究におけるビデオの位置づけは上記のようなデータ収集のひとつの記録媒体とは異なるものである。本研究のビデオを用いたカンファレンスの方法論は、トービンら(Tobin, Wu & Davidson, 1989)の用いる「ビデオ・エスノグラフィー」に示唆を得たものである。トービンらは日本、中国、アメリ

カの幼稚園にビデオを持ち込み、その映像を編集し、それぞれの国の保育者に視聴させた。自分たちとは異なる文化の保育を観た保育者はその違和感を言語化し、研究者であるトービンらはその語りを分析した。このような手法を用いて、それぞれの文化の保育を相対化させ、特質を浮かび上がらせたのである。編集された映像は単なる記録ではなく、保育者の暗黙知を引き出す「刺激(cue)」としての機能を果たした。本研究で用いられるビデオ映像も、その映像から多様な声を引き出し、議論を誘発する役割を担っている。

目の前で起きている現象が未知なるものであるとき、保育者や研究者はその出来事の意味を理解しようと努める。保育者は担任としてビデオ映像に写っているときでさえ、すなわち、当事者であったとしても、その出来事の全ての意味を詳細に理解しているわけではない。むしろ、暗黙知化された保育行為のなかで、無意識のうちに保育行為を選択し保育を行っていることが多い。特に、本研究で焦点をあてる「森の日」とは、保育環境としての森、そして「森の達人」という通常の保育とは異なる不確定要素が多く、保育者であったとしても何が起るかわからない状況であったといえる。以上のようなことを踏まえ、森で何が起っているのか、子どもたちがどのような経験をしているのかを明らかにするために、活動をビデオで録画しビデオ・カンファレンスのなかで園外の関係者をふくめた参加者で議論し、当事者である担任保育者がその経験を語りなおすことでその現象や経験の意味を導き出すことをビデオ・カンファレンスの第一の目的とした。

4. ビデオ・カンファレンスの特質と課題

以下では、4歳児と5歳児の各担任がビデオ・カンファレンスを振り返り、それぞれのカンファレンスについて考察を行う。そして、その考察を踏まえビデオ・カンファレンスと特質と課題を整理する。

1) ビデオ・カンファレンスを振り返って

(1) 4歳児ビデオ・カンファレンスの振り返り

[平成22年5月14日]

「森の日」としては3回目。子どもたちは少しずつ、山際で遊ぶことを楽しむようになってきた。その様子をビデオに撮ったが、この日はビデオ記録なしでカンファレンスを行った。職員がそれぞれ観察した子どもの様子や感じたことを話しあい、今の子どもたちの姿やどのようなかわりか大切なのかを考えた。それぞれの職員が見た姿からなので、保育者が見れていなかったいろいろな子どもの姿に気づくことができた。また、「森の達人」と保育者のポジションや森に文化物

を持ち込んでもいいか、持ち込まないのかなど、「森の保育」を進めていく上での共通認識をする機会となった。カンファレンスを行うことは、他の保育者の思いや考えに触れたり、そこからどう保育をしていくかを考えたりすることができるので、「森の幼稚園カリキュラム」を作成するためには必要であると改めて思った。

しかし、ビデオを見ながらのカンファレンスではなかったため、同じシーンを共有することができなかった。微妙な雰囲気やニュアンスだったり表情だったりを見ることができなかったため、子どもの内面を読み取るための協議ができにくかったと感じている。

[平成22年6月18日]

「森の日」としては6回目。「森の日」には、朝から森に行って森で遊ぶ日だということが子どもたちも分かってきていた。雨の日ということで、カッパを着て雨の様子を感じたり、雨の日には虫がどこに雨宿りをしているのかを探したりしに出かけることにした。

この日はビデオを見てのカンファレンスを行った。それぞれの職員が観察していたことに加え、ビデオを通してカンファレンスに参加している皆が同じシーンを見ることができた。そのことにより、保育者が見れていなかった個々の子どもの興味や関心の芽先をみることができたり、保育者が遊んでいる子どもたちから離れた後の子どもたちの様子も見ることができ、子どもが発する声の大きさや表情からも、その子が何を感じているのかを捉えたり考えたりすることができた。

鳥の糞を子どもが見つけたシーンでは、保育者は「なんだろうね〜」と子どもと一緒に匂いを嗅いだり近くで見てみたりするなど、ファンタジーの世界を大事にしようとかかかわっている。しかし、「森の達人」は「それは、鳥の糞よ」と正しい知識を教えていた。子どもたちにとって、正しい知識を得ることも大切だし、分からないからこそ想像して楽しむということも大切である。保育者と「森の達人」で話をし、目の前にいる子どもたちに何を大事にしたいのかを伝えたり、話したりしながら、一緒に保育していくことの大切さを感じることができた。

また、子どもたちの様子をいろいろな視点から見ることで、保育者が提示したことによって子どもたちは本当に興味をもっているのか、何に興味をもっているのかを考えることができた。子どもたちは普段虫に興味をもっている子どもが多いので、雨の日には虫たちはどうしているのかということと一緒に探したり見つけたりすることを楽しむと思っていたが、「雨宿り」に興味をもっている子どもは実際には少なかった。それよりは、雨が地面をつたって川のようになっていること、その

雨水は流れていること、雨水が行き着く先はどこなのかということに興味をもったり、地面に興味をもつことで、普段は発見しないものを見つけてみたりなど、実際に触れたり動いていたり変化がすぐ分かるものに興味をもっているということに気づくことができた。そしてこの時期には、全体での共有ではなく、“個々の発見を大切にして、それに共感していくことを大切にする”ことの方が大事なのではないかという意見もでて、改めて自分の保育を見直す機会となったことは確かである。

このような気づきは、保育者が保育しているときには気づきにくく、ビデオを通して客観的に見ることで保育を振り返ることができるのだと思う。客観的に子どもたちの姿をじっくり見ることで、子どもたちの実態やその時に大切にしておきたいことなどが見えてくる。単に担任保育者だけがビデオを見るだけでは保育に関する認識を深めることができるわけではない。ビデオを通してみんなが同じシーンを見ることで、いろいろな保育者がいろいろな視点から意見を出し合うことで、子どもたちの姿をうけての保育が可能となる。森の幼稚園カリキュラムを作る上で、子どもの様子を見ながら保育を見直したり意見を出し合うことは、次の保育につながる取り組みだと感じた。(久原有貴)

(2) 5歳児ビデオ・カンファレンスの振り返り

[平成22年5月6日]

このカンファレンスは、「森の日」の活動を受けて行われた。前述のように「森の日」には「森の達人」(以下、達人)が来園し、子どもたちとかかわる。この日は、3回目の森の日で、保育者の側からはしご作りがしたい旨を達人に伝えており、その活動がメインとなった。

この当日のビデオの内容は、達人の言動を中心に撮られていた。達人の言動は保育者である筆者も気を配っていたので、ビデオに映った場面自体は、ほとんど筆者としても把握しているものであった。その中で話題の中心となったのは、共同執筆者である大学教員が提示した『何でも「答え」を知っている「森の達人」の危険性』という点であった。ビデオでは、子どもが見つけた木の根元にある小さな粒を不思議がっているときに、「これは〇〇だよ」と教えたり、はしごにする木について、「この木は切ってもすぐに再生する」という話をしたりしている達人の姿だった。そのような「正解」を伝えることが大事なのだろうか、ということ意見が交わされた。筆者はその言動を現場で見えており、実のところ多少の違和感を覚えていた。しかし、それははっきりと言語化して異議を唱えるほど、

明確な指針は持っていなかった。

ビデオで同じ場面を振り返り、またカンファレンスでの意見を聞くうちに、幼児にとって大事な「不思議さや面白さを深めていくこと」だと考えるようになり、達人にも同じスタンスで臨んでほしいと思うようになった。

このカンファレンスを受けて、筆者は達人と話し合い、「不思議さをそのままとどめておく姿勢」を確認した。そして、筆者自身が、集いなどの場ですすんでその姿を見せるように努めた。このことは、今後の森での活動の大きな指針となった。また、達人の役割、保育者役割を考えるきっかけになっていった。「森の日」を行い、「森の達人」を呼んで保育を行う上で、この問題は避けて通れない大きな問題となっていた。

[平成22年6月24日]

「森の日」も回数を重ね、子どもたちも達人も慣れてきた時期の活動であった。ビデオも、ある子どもに焦点をあてて、その活動の始終を映したものになっていた。

その一つの場面は、男児が綱渡りに挑戦しているものであった。筆者もその始終を見ていたので、特に新たな気づきはなかったが、その姿を見たカンファレンス参加者からその頑張りに対する感動の言葉や、筆者が見守る姿勢への賞賛を聞くことで、筆者自身の保育が認められているという肯定感を味わうこととなった。そして、結果として、今後の保育でも挑戦場面で多く口を出すのではなく、子ども自身が心の葛藤をしている場面を大事に見守っていこうとする姿勢につながった。このビデオおよびカンファレンスの内容には他の保育者も影響を受け、少なからず今後の保育につながっていったと思われる。ビデオを用いたカンファレンスは、各人が言語化する作業を伴うがゆえに、単なる保育参観より有効に、保育の方向性を共有するツールになりうるのではないだろうか。今回のことで、「挑戦」的な活動に対する、保育者のかかわりが共有できたように感じている。

ビデオのもう一つの場面は、ある男児がヤシャブシの実を取ろうと試行錯誤している場面であった。この男児はさほど目立つ子どもではなく、私自身もヤシャブシを取っているのであろうことは気づいていたが、ビデオで示されているような、度重なる試行錯誤には全く気付いていなかった。今回のことで、この男児の粘り強さや行動力という、今まであまり認識していなかった側面に気づくことになり、その男児の理解を深めることができた。このように、保育者が普段見逃していることへの情報を与えてくれるのも、ビデオ・カ

ンファレンスの特長だろう。また、同時にそのような行動を引き出した自然環境の意味を考えるきっかけともなった。保育室で行う保育は、意図性の高いものが多いが、自然の中で行う保育は、無意図性のなかで、そのものの可能性に気づいていけるような援助が有効なのではないかと考えるようになった。(松本信吾)

2) 他のカンファレンスとの比較による、ビデオ・カンファレンスの特質と課題

(1) 「エピソード記述」と「ビデオ記録」によるカンファレンスの違い

近年、保育カンファレンスは多様な形態で行われている。例えば、ここ3年間、附属幼稚園ではカンファレンスのなかで議論する媒体として、「エピソード記述」を用いた保育カンファレンスについて検討してきた⁴⁾。「エピソード記述」は保育者の思いや幼児理解が全面に描き出された記録であるため、それを読み合い議論する際は子どもの内面、そして保育者の内面に焦点があつたものとなっていた。議論に用いる媒体として、他の誰でもない一人称の〈私〉によって描き出されるエピソード記述には、自己の問題意識が明確に打ち出されているために、そのような議論の内容になったものと思われる。

他方で、4歳児担任の考察にあるように、場面の共有という意味で、ビデオ映像を用いたカンファレンスの方が、保育活動の微妙なニュアンスや子どもの表情などをイメージすることが出来たという。その意味では、ビデオは情報量が豊かで、何度も繰り返し視聴できるため、「森の日」の保育活動がその場になかった第三者にとっても理解しやすく議論も活発になったと思われる。すなわち、情報の共有という意味で、ビデオ映像は他のカンファレンスで用いられる文字データよりも、有効な手段であったといえるのではないだろうか。

(2) ビデオ撮影と撮影者の問題意識

本研究におけるビデオ・カンファレンスで用いられた映像は第一筆者がビデオを撮影し編集したものである。撮影された映像は、撮影者の問題意識で切り取られた「現実」である。また編集作業の段階で場面を取捨選択するため、編集者である第一筆者の問題意識を大きく反映したものになる。5歳児担任の考察からも伺えるように、ビデオを撮影した第一筆者の関心により、その回ごとで内容が変わっていることがわかる。5月6日の場面では、「森の達人」の役割に焦点があつており、一方、6月24日は数人の男児たちが必死でヤシャブシを採ろうとする試行錯誤の活動をビデオ

映像として取り上げた。もちろん、撮影した際に、問題意識を明確にもって「本日はこの場面を撮影しよう」と決めて撮影しているわけではない。撮影しながら、普段の保育室の保育とは異なる違和感やダイナミックな保育の展開がみられるような場面にカメラアングルを向けていた。そして、後で編集する段階になって、いくつかの「問い」として保育者に投げかけることができるような内容として、数分のビデオ映像に編集したつもりであった。言い換えるならば、議論しやすいような場面を抽出していた。ここに、ビデオ・カンファレンスで採用するビデオ映像の難しさがある。映像を提示する側は、単に議論しやすい場面ではなく、目的に応じた場面の選択と、議論の方向性もその目的に応じて修正していく必要があるだろう。

5. ビデオ・カンファレンスからカリキュラム作成へ

以下では担任以外の立場から、ビデオ・カンファレンスに参加した教員が、ビデオ・カンファレンスの特性やカリキュラム作成への課題について考察する。

1) ビデオ・カンファレンスによって読み取れるもの

ビデオ・カンファレンスで討議を行ったことは、同じ場面をその場にいなかった保育者や第三者が共有でき、子どもの姿に対する担任に自分自身を置き換えて、保育実践を語ることができた。さらにいえば子どもの捉えの違いや別の援助をもたらす効用があったと考えられる。さらに、担任が実際の場面では上手く言語化できなかった思いや意図も、ビデオ・カンファレンスの折には、言葉にできるようであった。本研究では、その語りを子どもの森での活動の経緯と照らし合わせて、保育者の援助を探り、森の幼稚園カリキュラム作成につなげていきたいと考えている。本研究での実践は、保育者が自らの実践を振り返り、語ることで意識化し、過ぎ去っていったその“場面”をつなぎ止め再構成する作業になった。また、それぞれの担任が実際の指導計画（月案）を立てる折に、ねらいの中に、「森での」ねらいが要するという気づき（共通理解）にもつながり、保育プランの作成にとって有効であったと思われる。（林よし恵）

2) カリキュラム作成への課題

ビデオ・カンファレンスを行うことで、「森の日」において実際にどのような活動が行われているのかについて他のクラス担任として知ることができた。保育者と子どもとのやりとりについてビデオを見ながら話し合う中で、それぞれの保育者の保育観や考え方について知る機会にもなった。また、保育の導入・展開などについて、どのような保育のやり方、考え方がある

のか保育者同士で考えを出し合う中で、自分の保育の見方の幅を広げることにもつながった。ビデオを用いることで、具体的な場面を用いて、保育者の姿、子どもの姿、環境などを背景として保育を考えることができ、具体的に保育を考える上で有効だったと考えられる。さらには、ビデオを見ることでその子どもの活動、表現だけではなく、表情や仕草などを通してその子どもの森での姿を捉えることができ、個々の子どもの姿を保育に生かすという点で有効だったと考えられる。

最後に、カンファレンスとカリキュラムとの関係について考えてみることにする。ビデオ・カンファレンスをする中で、「森の達人」の位置付けや、その活用方法、あるいは、「森の日」が子どもたちにとってどのような意味があるのかなどについて話し合い、共通認識することができた。また、他学年の活動内容を知ることによって、森（自然）という体験がそれぞれの子どもの発達に応じてどのように考えていけばいいのかについて考えることができた。この2点は、同じ考え方・認識をもって保育カリキュラム作成について研究を行うという点では有効であったと言える。

その一方で、カンファレンスの気づきをカリキュラムの中に具体的にどのような形で生かしていくのかという点については課題となっている。なぜなら、カンファレンスをする中で、個人の保育観の変容や、森の保育における共通認識のきっかけにはなり得るが、そのことをカリキュラムとして、目に見える形で表現することは困難なのではないかと考えるからである。カンファレンスを行う上で、どのようなテーマ（視点）で話し合いを進めていくのがいいのかということについては、今後も研究を重ねていく必要がある。（日切慶子）

6. 総合考察

本研究はカリキュラム作成のためにビデオ・カンファレンスを試行した。その第一の目的は、森での子どもたちの経験を把握し、附属幼稚園の保育内容を整理するためである。第二に、整理された保育内容をもとに、年齢ごとの保育のねらいなどを定めカリキュラムの柱を導き出すことにあった。成果としては以下の2点に整理することができる。

第一に、ビデオ・カンファレンスにより、参加者の間で子どもの様子やそこでの経験などを共有化し、カリキュラム作成に向けた保育内容や森や「森の達人」に対する理解など共通認識を計ることができた。文字による実践記録よりも、視聴覚に訴える媒体であるため共有も容易であり、そこから生まれる議論によりカリキュラムの基礎となる子ども観、自然観などを共有

できたと考えられる。

第二に、ビデオ・カンファレンスは、多声的な省察を促すことができた。ビデオを撮影した研究者の関心によって切り取られる「現実」は、その場面にいた担任の思っていた「現実」と一致している場合もあれば、そうでない場合もある。トーコーン (Tochon, 2007) は、ビデオ映像による教育実践の振り返りは、このような当事者のもつ「フィクション (思い込み)」による認識を避けることができ、その場になかった第三者との間主観的な対話へと開かれる点であると指摘している。目の前の映像を共有するなかで、多様な解釈が生成され、多声的な語りが導き出された。これをトービンら (Tobin & Hsueh, 2007) は、バフチンの言葉を借りて「多声的なアプローチ」と呼んでいる。当事者が一人でビデオ映像をみて振り返るのではなく、複数の立場から語られる解釈や意味づけによって、保育実践は独りよがりの反省ではなく、多声的な省察を促していたと考えられる。

最後に本研究の課題を挙げておきたい。本研究では、ビデオ・カンファレンスでの成果をカリキュラム作成に十分につなげることができなかつた。言い換えるならば、カンファレンスでの議論が、直接的にカリキュラムを作成する際に有効に機能しなかつたということである。これは単に、カリキュラム作成にビデオ・カンファレンスは不要だということを意味しているのではないと思われる。日々の保育計画や保育実践と、カリキュラムとの間に開きがあることは加藤 (1997) が指摘しているが、その抽象度の違いも含めその間の溝を埋めることができなかつたことが問題であったと考えられる。また、そのことは、森の幼稚園カリキュラムが何であるのかという点を明示できなかつたという点にもあらわれている。その原因としては、ビデオ・カンファレンスでの省察をきちんと言語化してまとめ、それをカリキュラム作成時に用いるようなツールの不在が考えられる。すなわち、ビデオ・カンファレンスのなかで議論して満足するのではなく、そこで得られた子どもたちの経験を保育者自身のなかだけではなく、言語化して蓄積していけるツールと仕組みづくりが求められているといえるのではないだろうか。この点は今後の課題としたい。

注

1) 「森の日」の具体的な活動については、広島大学附属幼稚園 (2010) を参照。

- 2) 具体的な森の幼稚園カリキュラムについては、広島大学附属幼稚園 (2010) にまとめられているため本稿では詳細な言及はしない。
- 3) 保育現場へ記録媒体を持ち込む際の留意点や倫理性については、石黒広昭編 (2001) を参照。
- 4) 岡花祈一郎・杉村伸一郎・財満由美子・林よし恵・松本信吾・上松由美子・落合さゆり・武内裕明・山元隆春 (2010) 『『エピソード記述』を用いた保育カンファレンスに関する研究』『学部・附属共同研究紀要』第38巻. 131-136頁を参照。

引用参考文献

- 広島大学附属幼稚園 (2010) 『広島大学附属幼稚園紀要：森で育つ—森の幼稚園の保育プラン—』
- 石黒広昭編 (2001) 『A V 機器をもってフィールドへ：保育・教育・社会的実践の理解と研究のために』, 新曜社。
- 加藤繁美 (2007) 『対話的保育カリキュラム・上』 ひとなる書房。
- 大豆生田啓友 (1996) 「保育カンファレンスにおける語りとビデオ」『発達』68号, ミネルヴァ書房, 17-22頁。
- 上野ひろ美 (2007) 「実践研究とカリキュラム作成の往還—「保育カリキュラム試案」(福山市・福山市保育連盟) の場合—」『奈良教育大学紀要』第56巻, 第1号, 55-65頁。
- 上村 晶 (2010) 実習事前指導における模擬保育ビデオを活用したカンファレンスの実際と効果『高田短期大学紀要』第28号, 89-100頁。
- Tobin, J., Wu, D and Davidson, D. (1989). *Preschool in Three Cultures: Japan, China, and the United States*. New Haven: Yale University Press.
- Tobin, J. & Hsueh, Y. (2007). The Poetics and Pleasures of Video Ethnography of Education., In R. Goldman, R.D. Pea, B. Barron & S.J. Derry (Eds) *Video Research in the Learning Sciences*, Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum. pp.77-92.
- Tochon, F.V. (2007) From Video Cases to Video Pedagogy: A Framework for Video Feedback and Reflection In Pedagogical Research., In R. Goldman, R.D. Pea, B. Barron & S.J. Derry (Eds) *Video Research in the Learning Sciences*, Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum. pp.53-66.